

## ファン・ボイ・チャウ（潘佩珠）と明治日本

### ビン・シン

#### 一、ファン・ボイ・チャウについて

ファン・ボイ・チャウ（一八六七—一九四〇）は日本ではあまりなじみがないと思うが、ベトナムでは、死後六十五年の歳月が経った今日でも人々に敬慕されている。たとえていうならば近代中国の父・孫文のような存在なのだ。

二十世紀初頭、当時仏領であったベトナムで、ファンは独立運動の旗を掲げた最初の一人であった。ベトナム中部のゲアン省の貧しい儒者の息子として生まれたファンは、一九〇三年、科挙の会試（地方で行われる郷試の及第者を都に集めて行う試験）を受けるために当時の都、フエ（順化）市に上り、そこで中国の「新書」を通じて明治維新後の日本の目覚ましい躍進を知り、同時に、

ベトナムをめぐる厳しい国際情勢を意識するようになった。憂国の思いにかられたファンは科挙の夢を途中であきらめ、翌年の一九〇四年、他の有志と共にグエン（阮）朝皇族クオンデー侯を盟主に「維新会」を結成し、抗仏運動に身を投じた。

日露戦争に勝利した日本から武器援助を受けようという計画の提唱者であったファンは、維新会の代表として仲間二人と一緒に日本に派遣された。彼らはフランス官憲の目をくぐってベトナムから先ず中国に脱出し、上海から神戸行きの汽船に乗った。神戸で汽車に乗り換え、ようやく目的地横浜に着いたのは一九〇五年六月の初め、時は日露戦争終了間もなかった。

アジアの一小国である日本が、かつてヨーロッパで強力だった帝国を打ち破ったという晴天の霹靂のニュースに沸く日本を、ファンは目のあたりにしたのである。



図1 ファン・ボイ・チャウ  
(Courtesy of Dr. Phan Thi Minh Lý)

横浜に降り立った理由は、当時中国から亡命していた中国の立憲改革派の指導者、梁啓超が住んでいたからだろう。ファンがベトナムにいることから、愛読し啓発させられた「新書」なるものは、主として梁啓超の著作や梁が横浜で編集した『新民叢報』の開明的な記事であった。後年出版されたファンの『獄中書』に、神戸行きの船中、中国人留学生から横浜にいる梁の住所を教えてもらったと記されている。こうして、横浜に到着してまもなく、ファンはかねてから慕っていた梁に手紙を出して面会を求めたのである。手紙の筆頭に、梁の著作に接した経緯について漢文で次のように認めている。

落地一声哭、即已相知  
讀書十年眼、遂成通家

落地一声の哭、即ち已に相知る  
讀書十年の眼、遂に通家となる、

ファンは梁と話し合っているうちに——ファンたちは日本語を解さず、中国語も話さないで、実質的には漢文での筆談だが——来日当初の目的である日本からの武器援助要請計画を取りやめた。独立達成には人材の養成こそが緊急の大事であることを説得された。梁の紹介によつて知遇を得た犬養毅、福島安正、柏原文太郎、根津一なども梁とほぼ同意見であった。そこで、ファンはベトナム青年を日本に留学させる運動に着手した。これがベトナム史でいう東遊運動（一九〇五—一九〇九）の始まりだった。

ファンの呼びかけに対するベトナム国内の反響は大きかった。東遊運動のピークである一九〇七年から一九〇八年の初め頃には在日ベトナム人学生の数はいく百人を超えたという。留学生たちは犬養氏らの斡旋で振武学校や東亜同文書院などで学んだ。

ファンは留学生の世話や指導をするかたわら、同胞に対し抗仏に立ち上がるように呼びかける詩文などを創作、著述し、秘密裏にベトナム国内で配布させるなど、忙しい毎日を送った。彼は後に次のように回想している。

一九〇七年（明治四〇年）から一九〇八年冬までが、東京への留学生の最盛期だった。私の仕事も多忙をきわめた。留学生を学校に入れる交渉、宿舍の世話、経費の調達など、多くの責任を持つ私は、さながら私設の駐日ベトナム公使のよう

なものであった<sup>2</sup>。

しかし、フランス当局もその頃から東遊運動のメンバーを監視するようになり、ベトナム国内では、留学生の資金源を絶つためにその父兄親族を投獄した。日本とフランスとの「両国が東アジアに持っている権利を尊重しあう」日仏協約（一九〇七年）の締結後、東遊運動に対する牽制も一段ときびしくなる。慶応義塾大学をひながたとして、ハノイで設立された東京義塾（ドンキン・ギアトウク）も閉校させられた。フランス政府に依頼された日本当局も、東京にいる維新会メンバーの動静取り調べを容赦なく開始した。遂に、ファンとほとんどの学生は一九〇九年三月に断腸の思いで日本からの退去を余儀なくされた。

日本を離れたファンらはいったんシャム（タイ）に渡り、そこで長期的抗仏根拠地を築こうと模索したが、一九一一年一〇月の辛亥革命の報に接するとファンらはベトナム北部に隣接する広東に戻り、ベトナム版の光復会を結成した。光復会は一種の亡命政府をつくり、中国の民国政府と同様、君主主義を放棄し共和制を採用するとともに、光復軍を組織して国内で武装蜂起を計っていた。だが、これらの蜂起は現在のことばでいえば散発的なテロ行為に過ぎず、植民地政府に打撃を与えなかったばかりか、ファンの有能な同志たちの多くは犠牲になったり、投獄されたりした。

一九一八年以降、ファンは杭州を拠点として、広東、香港、朝鮮を経由して日本などを往来した。彼の回想録によると、これらの旅行は、単なる気晴らしのようなものが多かったようで、とりわけ革命計画の打ち合わせのためでもなかった。杭州に滞在している間、ファンは雑誌に原稿を書いたり、著述したりして、とりあえず若い活動家やベトナムから中国に来たばかりの留学生の生活の面倒を見たりした。

一九二四年の終わりにグエン・アイ・クオック（阮愛国）——のちホー・チ・ミン（胡志明）といわれる——がヨーロッパから広東の政治舞台に現れると、若い活動家たちは独立運動の新しい担い手としての阮愛国のもとに結集するようになった。ファン自身も阮愛国に大いに期待をかけ、ベトナムの前途を託そうとしたようだった。一九二五年七月に、ファンが阮愛国を含めたベトナム人活動家と会談するために杭州から広東に向う途中、上海駅でフランス官憲によって逮捕された。本国に連行されたファンは同年十一月、ハノイの法廷で終身懲役の判決を言い渡された。

ファンの有罪判決のニュースが公になると釈放要求運動がベトナム全土に繰り広げられた。当時、インドシナ総督ヴァレンヌの宥和政策により、ファンは釈放され生涯を終えるまでフエ市で軟禁生活を送ることになった。フエ市で彼は執筆に力をそそぎ、静かな余生を過した。一九二八—一九年に記された回想録の冒頭に、

フアンは自分の人生を振り返って次のように懺悔している。

私の半生の歴史は終始一貫、語るに堪えざる失敗物語に過ぎなかった。<sup>3</sup>

だが、フアンは祖国の未来については変わらず楽天的で、若い世代に民族独立の夢を託している。いわく、

将来、皆がこの私の苦い経験を活かして、綿密な闘争計画を改め、捲土重来死を賭して事に当たれば、最後のゴールに到達することも強ち夢ではあるまいと確く信じているからである。<sup>4</sup>

フアンは一九四〇年一〇月二九日に死去。享年七五だった。

## 二、フアン・ボイ・チャウが見た明治日本

フアンは日本を訪れた最初のベトナム人ではなかった。少なくとも文献上では、八世紀半ば、日本の雅楽や仏教音楽などに貢献した仏哲（徹とも書く）という僧が最初の人であつたらしい。江戸時代には現在のインドシナ半島から度々漁民などが日本に漂着

したと漂流記などに記されている。

武器援助要請の目的を人材養成に転じて、四年余り滞在し、日本当局によって退去を余儀なくされたフアンではあるが、日本についての印象を回想録や他の著作の中で残している。しかも、記された印象は後々、ベトナム人の日本のイメージ作りに大きく影響を与えていると思われる。

フアンの日本観の形成には大きく二つの要素が挙げられると思う。

その一つは漢文書物からの影響である。年少のころから科挙試験準備のなかで、中国の古典によるものの考え方や世界観に浸りきっており、遂に生涯それを超えることができなかった。およそ四年間日本に滞在したにもかかわらず、事実上、最後まで日本語を習得しなかった。その理由については、毎日の雑用に追われていたためだったと、フアンは回想録に説明している。

いずれにせよ、彼が習得した外国語は漢文だけだった。それ故、日常の見聞はともかくとして、日本について多少でもまとまった知識を得るには、漢文の文献に頼らなければならなかった。当時、日本に滞在していた梁啓超の改革派や孫文の革命派が日本で出した出版物がフアンの主な読み物であつたろう。そこから察するに、日本観についても、漢文経由であつたと思われる。しかし、知識の限界を意識し悩んでいた様子が後年の回想録にうかがい知れる。

ああ、一九世紀の中葉、欧米の風潮が世界にみなぎる時、ひるがえってわが国を顧みればまさに熟睡中であつたのであつて、全く世間知らずで井の中の蛙にも及ばない……けだしわが国が前に鎖国の時代には、あらゆる見聞は漢学科挙の文詞に限られて居つたので、これを指して唾盲の国民というのも当然でした……私は革命によつて初めて海外に出るのです。

もとより一国革命党の代表として往くにしても、私が才学秀でて見聞広く、外国の文字・言語・政治・學術について縦横爛熟して居るならば、たとえ亡国の恥があろうとも、優勝の人々に慚ずることなく、むしろわが国民の光彩でもあり得ましょう。惜しいかな、不幸にして初めて世界と相見える第一人が、私のように愚昧であつて、才学ともに低く、わずかに若干の漢文を知る外、軽重の値なく、その才学ともに品等するに足りないで、わが国民の面目を落とすような者では、何処にか身をおく処がありません！。

西洋諸国の言語や文化に堪能な者は、民族の誇りを売り渡したかの如く取られているような知識人の状況の中で、一九〇四―五年の日露戦争での日本の大勝利は、歴史事実として仏領下ベトナムにおいての衝撃は

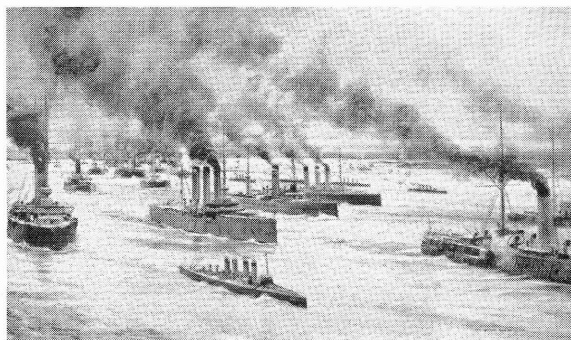


図2 シンガポール沖を通過中のバルティック艦隊  
(A. Novikoff-Priboy, *Tsushima*, trans. into English from Russian by Eden and Cedar Paul, New York: Alfred A. Knopf, 1937, p.95.)

特に多大であつた。四十五隻の戦艦から編成されたバルティック艦隊はバルト海から日本海までの回航中、日本と同盟を結んでいたイギリスの厳しい監視体制によつて、燃料及び食料補給地として二ヶ所しか立ち寄ることができなかった。一つがマダガスカル、もう一つがベトナム中部のカムラン湾だった。マダガスカルはその時点においてはまだロシアびいきだったからである。

バルティック艦隊は一九〇五年三月の末から半月ばかり、大きな円形を描いてカムラン湾に停泊していた。その時ファンの知人であり、ファンと同様に、憂国の士として全土に知られていた潘周棹・黄叔沆・陳貴哈の三人はカムラン湾に出、食料の売り子を装ってロシアの戦艦に上がり、自からの眼で戦艦内部を見学していたのである。その強大な艦隊が後日、全滅させられた報は当時のベトナム知識人たちを大きく揺さぶつたであろう。十年後、ファンは日露戦争のインパクトについて回想したとき、それをあたかも昨日起こった事件のように語った。

このときにいたって東風一陣、人をしてきわめて爽快の想いあらしめた一事件が起こりました。それは他でもなく旅順・遼東の砲声がたちまち海波を逐うて、私達の耳にも響いて来たことでありました。……旅順・遼東の砲声がなかったならば、わが国民は……大フランス国以外に如何なる世界があるかを知ることとはなかったのであります。

ファンは、日露戦争における日本の勝利を当時の多くのアジア人と同様、東亜の黄色人種の白人に対する勝利として受けとめた。さらに彼はもう一步踏み込んで、日本はベトナムと「同文同種」、ロシアを打ち破った日本は今や「黄色人種のなかで近代化された唯一の国」であり、フランスをベトナムから追い払うために、日本に武器援助を要請すれば、きつと承諾してくれる筈だと思いつていた。

ファンは近代世界の列強競争を大幅に単純化して、時代をあたかも中国戦国時代的に眺めたかのようにであった。彼の眼中にはベトナムに対して植民地的野心を持っている国はフランスだけであつて、悪玉のフランスに復讐するためには、いかなる方便を用いてもかまわないかのようにだつた。それ故、彼は秦始皇帝報復にかられた漢の高祖に仕えた張良ちやうりやうのような英雄豪傑に憧れたり、日本に武器の援助を求めに行く我が身を、春秋時代、秦国へ援軍を

求め、その朝廷で七日間泣いてついに援軍を得た楚の申包胥しんほうしよに例えたりしたのであつた。

さて、ファンが日露戦争当時持っていた「同文同種」の考えは来日後、どのように展開したのであろうか。

日本から国外退去を余儀なくされたとき、彼は断腸の思いで日本を離れた。だが、それでも、ファンは世界「強権」の一員になつた日本に完全に失望してはいなかつた。日本をアジアのリーダーとして、もはや過大な期待はしなかつたが、西洋の列強と立ち向かうには、日本と中国の提携がなければならぬと信じた。「同文同種」の日本への羨望と期待は失われていなかったように思われる。現に、晩年になつて記した回想録のなかに、彼は日本で過ごした東遊運動期の四年間は自分の全生涯において「いちばん充実した時代」だつたと述べている。ファンの現実認識に変化があつたとすれば、列強の膨張政策による被害を蒙っている運命にあつた「同病」の中国への期待にさらなる力点を置くようになったことだつただろう。こうした「同病」や「同文同種」の意識に基づくファンのアジア主義はその後シヤムや中国で執筆していた『連亜趣言』(一九一一)および『亜洲之福音』(一九二二)にもよく現れている。

ファンの日本観の形成には漢書から学んだ他に、もう一つの要素は日本滞在の体験によるものがある。彼は著作のなかでたびた

び明治の好ましき事々を紹介している。おそらくそれはファンの眼に映った日本人の心榮えといえるものだろうと思う。

初来日のときだった。神戸港に到着すると、ファンら三人は汽車に乗りかえて横浜まで行った。ところが、横浜駅（当時は平沼駅）に着いたとき、三の宮駅で預けた荷物が一向見当たらず、すっかり困って駅に立ち往生していた。すると「白い帽子をかぶり、剣を帯びた日本人」が近寄り、手帳を出して、「あなたがたはなぜずっとここに立っているのですか」と漢文で書いてたずねた。ファンは「預けた行李が見当たらない」と書いて答えた。警官はそれを見て、「あなたがたのためにすでに旅館を取っているので、行李はそこに届きますからそこへ行って下さい」と言い、「人力車三台を呼んで、車夫に何かひとこと言った」。あつという間に旅館に着き、部屋に入って座って「席もまだ暖まっていないうちに行き届いた」。

ファンは次の説明を付け加えている。

日本の鉄道規則によれば、乗客は荷物と同じ車輛には乗らない、また人間と動物は同じ車両に乗せない、たとえ四等車でもそうである。衛生上の注意と乗客の安全のために、各車両に座席の定員や荷物の制限について張り札にきちんと掲示されている。運行中、係員はよく責任をもって面倒をみる。車

内に落し物があっても、拾うような人間はいない。

ファンの仲間の一人が電車の中で物を忘れたことがあったが、「数日後、探しに行ったらまだ同じ場所にあった」と。この話を述べた後、ファンは当時感じたことについてこのように記している。

それを見て私は嘆いていた。強国の政治とその国民の水準は、この一事だけを見ても我国とは雲泥の差がある。

他にも、横浜に住むようになって、ある日ファンは知り合い一人と、梁啓超が紹介してくれた殷承瓚いんしょうけんという雲南省からの留学生に会うために東京に出かけた。ファンは、殷が振武学校に在学中ということだけを知っていて、本人の住所さえ知らなかった。東京駅で下車して人力車を呼んだ。しかしその車夫は漢文がよく通じなかつたので、わざわざ漢文の堪能な仲間を紹介してくれた。この車夫の車で振武学校へ行ったが、殷がすでに卒業して暫く市内のどこかの旅館に部屋を借りていることが分かった。殷の宿泊先の住所も知らないのに、ファンらは思案に暮れていた。すると車夫は次のように書いた。「ここで必ず待つていて下さい。お知り合いの方の住所を探して、分かり次第すぐ戻りますので」。ファン



は気をもんでいた。広い東京に、旅館の数は数万軒もあるだろうに、どうやって一人の中国人の学生を探し出すのだろうか。それから、ベトナムの車夫のように法外な車賃を要求されるのではないだろうか、と。

車夫が殷の住所を探しに行ったのは午後二時頃だったが、五時になって、ようやく車夫はうれしそうな顔つきで戻ってきて、ファンらに車に乗るように手で合図をした。一時間ほど走ると無事に殷のいる旅館に着いたのだった。親切な車夫に車賃を尋ねると、「二十五銭です」と言われたファンは、あまり安価な車賃にびっくりした。ファンは車夫の労を感謝するつもりで財布から一円銀貨を差し出したが、車夫は受け取らず、こう答えた。「東京駅からこの旅館までの車賃はこの金額だと、内務省の規定によつて定まっております。しかも、皆さんは日本の文明を慕つて来られた外国の方で、それ故私は皆さんを歓迎するのであつて、お金のために皆さんをここに連れてきたわけではありません。私に過分な賃金を下さることは、日本人を軽侮することになります」。車夫の言葉を聞いたファンは大いに感銘を受け、「わが国の知識の水準と日本の車夫に比べると、恥しさのあまりに死んでしまいたいくらいだった」と結んだ。

### 三、結 語

今から百年前の一九〇五年という年を振り返ってみると、それは日本の歴史にとつても、ベトナムの歴史にとつても、確かに大きな転換期であつた。日露戦争の大勝利で、日本は不平等条約改正や列強と肩を並べるといふ幕末維新期以来の念願の夢を実現する最後のステップを踏み出し、大きな岐路に立っていた。ファンが見た明治日本は、近代国家をめざす国民意識が最頂点にあつたと思われる。他方、ベトナムでは、世界の大勢を知らせる「新書」の波が寄せてきた直後で、ファンがいう「旅順・遼東の砲声がたちまち海波を逐うて」、知識人たちの「耳にも響いて来た」。ファンや同年代の「憂国の士」はもはや都、フエ市にじつとしていられず、国事に奔走しだしていたのであつた。それがために一九〇五年はベトナムの近代史のたいへん重要な出発点だと私は考える。また、ファンの明治日本体験は近代日本・ベトナム交流史の事始めともなつていえると思う。

今日でも、ファンは多くのベトナム人に敬愛されている。その理由は、決して独立運動を最後の勝利まで導いた英雄としてではなく、身を捨てて植民地時代の長い暗黒な日々なかで民族の魂を呼び起こしたからであつたろう。ファンが呼び起こしたベトナム



ム「民族の魂」は、具体的に言って何であつたのか、と問われるならば、「ベトナムの国民国家 (nation-state) の意識」だと私は思う。国民国家としての意識と誇りの全盛期の日本（時期的には東遊運動期と重なるが）で過ごしたファンは、ベトナム各地から集まってきた若者たちと毎日生活をしながら、彼らの間の「国民国家意識」の欠如を感じないわけには行かなかつたのだろう。その「欠如の発見」についてファンは回想録のなかにかすかに言及している。故にファンは詩文や著作を通じてベトナム人に国民国家意識を持つように一生懸命に呼びかけた最初の人であつた。思うに、この問題意識はファン自身の明治日本との出会いと体験によつて生まれ出たものではないだろうか。

注

- 1 ファンは二つの回想録を残している。一九一四年に中国の牢獄で書かれた『獄中書』と、晩年、フエ市に軟禁された時期に書かれた『自判』（または『自批判』、あるいは『潘佩珠年表』ともいう）がある。本稿における引用箇所は、『獄中書』については長岡新次郎・川本邦衛編『ヴェトナム亡国史』所収の『獄中書』の日本語訳を原則として使用しているが、ところどころ分かりやすくするために多少加筆している（以下、『獄中書』と記す）。晩年の回想録については、ファンの長年の知人、黄叔沆所蔵の漢文回想録『潘佩珠年表』に基づいて、筆者が和訳してい

る。なお、漢文筆者稿『潘佩珠年表』にはページ数がないため、読者の理解を安易にするためにとりあえず、現代ベトナム語訳本の一つである Tu Phan (Hue: Nxb Anh Minh, 1956) から引用することにする（以下 TP と記す）。TP, p. 52.

- 2 『獄中書』一四〇頁。
- 3 TP, p.xv.
- 4 TP, pp.xv-xvi.
- 5 『獄中書』一一六―一二八頁。
- 6 『獄中書』一一六―一二七頁。
- 7 TP, pp.51-52.
- 8 TP, p.52.
- 9 TP, pp.64-65.